洪吟

（二）

李洪志

目 錄

堅定 1
無題 2
見真性 3
心自明 4
報應 6
法綱 7
正大穹 8
普照 9
除惡 10
無 11
留意 12
行中 13
解大劫 14
得道明 15
無迷 16
道中行 17
去執 18
無阻 19
緣結蓮開 20
漸齊 21
真言 22
秋風涼 23
預 24
大道行 26
劫 27
掃除 28
必然 30
淘 31
大舞台 32
戲一台 33
精進正悟 34
法正乾坤 35
大法好 36
鐘樓 38

鼓樓 39
佛法無邊 40
入無生之門 41
如來 42
正念正行 44
神路難 45
正神 46
天又清 47
震懾 48
快講 49
清醒 50
誰迷 51
網在收 52
還吧 53
神威 54
圍剿 55
梅 56
下塵 58
大法行 60
一念中 62
唐風 63
看好 64
讀學員文章 65
亂世 66
正法看 68
征 69
理智醒覺 70
金剛志 71
法正一切 72
龍泉寺 74
大法徒 76
法輪常轉 78
洪誓大願 79
救大穹 80
劫數 81
危 82

蓮 83
斷 84
香蓮 85
法正人間時 86
蠢 87
別哀 88
腰鼓隊 89
難 90
師徒恩 91
神醒 92
天門已開 93
怕啥 94
轉輪 95
洪劫 96

堅 定

覺悟者出世為尊
精修者心篤圓滿
巨難之中要堅定
精進之意不可轉

一九九九年五月三日
二零零四年二月修改

堅定（けんてい）

覚悟（かくご）した者、世を出（い）で尊師（そんし）と為（な）り

精進する修煉者、心を篤く、圓満に向かい

巨難の中、必ず確固たる意志で

精進の決意は変わらず

一九九九年五月三日

二〇〇四年二月修正

無 題

大法看人心
世人要清醒
神人鬼畜滅
位置自己定

一九九九年五月三日
二零零四年二月修改

無 題

大法（ダーファー）、人心を見る
世人（せじん）は目覚めるべし
神、人、鬼、畜（けもの）は滅され
位置は自らが定める

一九九九年五月三日
二〇〇四年二月修正

見真性

堅修大法心不動
提高層次是根本
考驗面前見真性
功成圓滿佛道神

一九九九年五月八日

真性(しんせい)が顕(あらわ)れる

大法(ダーファー)を堅く修めて、心動かず

次元を向上することこそ、是(これ)根本

試練を前にして、真性が顕れる

圓満して、佛、道、神に成る

一九九九年五月八日

心自明

法度眾生師導航
一帆升起億帆揚
放下執著輕舟快
人心凡重難過洋
風雲突變天欲墜
排山搗海翻惡浪
堅修大法緊隨師

心自(おの)ずから明らか

法は衆生を済度し、師は航路(こうろ)を導く

一つの帆昇(ほのぼ)れば、億の帆が揚(あ)がる

執着を放下(ほうげ)すれば、軽舟快(けいしゅうはや)し

人心凡俗(ぼんぞく)で重ければ、洋(うみ)を過(す)ぐること難(がた)し

風雲急変して、天墜ちんとす

山を排し、海を搗(つ)く荒波が翻(ひるがえ)る

大法(ダーファー)を堅く修めて、しっかりと師に随(したが)い

執著太重迷方向
船翻帆斷逃命去
泥沙淘盡顯金光
生死非是說大話
能行不行見真相
待到它日圓滿時
真相大顯天下茫

一九九九年十月十二日
二零零零年五月二十二日發表

執着重過ぎれば、方向に迷う

船翻り帆断たれ、命を逃れて去り

泥沙濯ぎ尽くして、金光顕れる

生死は、大言を説くに非ず

能く出来るかどうか、真の姿が見られる

待ち到る他日、圓満の時

真相大いに顕れて、天下茫たり

一九九九年十月十二日

二〇〇〇年五月二十二日発表

報 應

末世爛鬼多
披著人皮作
間隔一除盡
世上擺油鍋

二零零零年九月一日
庚辰年八月四日

応 報

末世(まつせ)に爛鬼(らんき)多し

人の皮を被(かぶ)りて

間隔を除き尽すと

世上(せじょう)に油の鍋が用意されている

二〇〇〇年九月一日

庚辰年八月四日

法 綱

明慧救度有縁者
新生可去脳中悪
人民刀筆鬼生愁
法輪大法是正見

二零零一年一月十七日
庚辰年十二月二十三日

法綱（ほうもう）

明慧（ミンフイ）、縁がある者を済度し

新生、脳中（あたま）の悪を取り除く

人民、刀筆（とうひつ）は鬼に愁（うれ）いを生（しょう）ぜしめ

法輪大法（ファールンダーファー）は是（これ）、正見

二〇〇一年一月十七日

庚辰年十二月二十三日

正大穹

邪悪逞幾時
盡顯衆生志
此劫誰在外
笑看衆神癡

二零零一年二月十日
辛巳年正月十八日

大穹(だいきゅう)を正す

邪悪の逞(たくま)しきは幾時(いくとき)までか

衆生の志尽(ことごと)く顕れる

此(こ)の劫(ごう)は誰が外に在(あ)る

衆神(しゅうじん)の癡(おろか)なるを笑って見る

二〇〇一年二月十日

辛巳年正月十八日

普 照

神佛世上走
邪悪心生愁
亂世大法解
截窒世下流

二零零一年二月十七日
辛巳年正月二十五日

普く照らす

神佛、世上で行い

邪悪の心に愁い生ずる

大法が乱世を解き

世の墜落を窒ぎ截る

二〇〇一年二月十七日

辛巳年正月二十五日

除 惡

車行十萬里
揮劍消惡急
天傾立掌擎
法正去陰羅

二零零一年二月十九日
辛巳年正月二十七日

悪を除く

車行きて、十万里

剣を揮(ふる)い、悪を消すこと急

天傾きて、掌を立てて擎(ささ)え

法は正しく、陰羅(かげり)を去る

二〇〇一年二月十九日

辛巳年正月二十七日

無

無無無空無東西
無善無悪出了極
進則可成萬萬物
退去全無永是迷

二零零一年二月二十二日

無

無、無、無、何も無し

善無く、悪無く、極(きわ)み出る

進めば、則ち万物と成る可(べ)し

立ち去れば、何も無く永遠の謎なり

二〇〇一年二月二十二日

留 意

一路征塵一路風
萬惡除盡萬眾生
勞心力解淵怨事
難得歡心看風景

二零零一年二月二十二日

留意（りゅうい）

一路（いちろ）の征塵（せんじん）、一路の風

萬の悪を除き尽して、萬の衆生が生ず

心を労し力（つと）めて解く、淵怨（えんおん）の事

景色を楽しむ心も得難（えがた）し

二〇〇一年二月二十二日

行 中

天涯何處險
一覽峽中天
神仙何處尋
對面不識仙

二零零一年二月二十二日
於美國大峽谷

行 中

天涯(てんがい)どこが険しいか

一望する峡中(きょうちゅう)の天

神仙を何処(どこ)に尋(たず)ぬ

対面しても仙であることを識(し)らず

二〇〇一年二月二十二日

アメリカの大峡谷にて

解大劫

多少人間亂事
歴經重重恩怨
心悪業大無望
大法盡解淵源

二零零一年二月二十二日

大劫(だいこう)を解く

多くの人間の乱れし事
重々(じゅうじゅう)なる恩怨(おんえん)を経歴す
心悪く、業大きく、望み無し
大法(ダーファー)はすべての淵源(えんげん)を解く

二〇〇一年二月二十二日

得道明

一朝天子一朝衆
朝朝接緣把法等
別管當朝緣中事
圓滿回家萬事通

二零零一年二月二十四日

道(どう)を得て明白

一朝(いっちょう)の天子、一朝の衆

朝朝(ちょうちょう)緣を結び、法を等(ま)つ

今朝(こんちょう)のどんな事にも管(かか)わる別(なか)れ

圓満して家に帰れば、万事通(ばんじつう)

二〇〇一年二月二十四日

無 迷

誰是天之主
層層離法徒
自命主天穹
歸位期已近
看誰還糊塗

二零零一年三月十四日

迷わないで

誰が天の主(ぬし)か

層層を離れて法徒(ほうと)になり

自らの命(めい)は天穹(てんきゅう)を主宰(しゅさい)す

帰位(きい)の時、すでに近し

誰がまだ目醒(ざ)めないのか

二〇〇一年三月十四日

道中行

大道世間行
救度迷中生
淘去名情利
何難能阻聖

二零零一年三月十九日

道中(どうちゅう)を行く

大道(だいどう)、世間を行く

迷いの中、衆生を救い済度す

名、情、利を淘(よな)ぎ去れば

いかなる難も聖人になることを阻(はば)まん

二〇〇一年三月十九日

去 執

雖言修煉事
得去心中執
割捨非自己
都是迷中癡

二零零一年四月十六日
辛巳年三月二十三日

執着を取り除く

修煉の事と言うなら
心の中の執着を取り除くべし
切り捨てることは本当の自己には非(あら)ず
それらすべて迷い中の痴(ち)

二〇〇一年四月十六日
辛巳年三月二十三日

無 阻

修煉路不同
都在大法中
萬事無執著
腳下路自通

二零零一年四月十六日
辛巳年三月二十三日

阻(はば)むこと無し

修煉の路(みち)、同じからず
すべて大法(ダーファー)の中に在り
万事執着無ければ
脚下(きゃっか)に路(みち)、自(おのずか)ら通ず

二〇〇一年四月十六日
辛巳年三月二十三日

緣結蓮開

風流人物今何在
大法開壇相繼來
歲月悠悠千百度
緣結正果眾蓮開

二零零一年六月十九日

縁結ばれて蓮(はす)咲く

風流人物、今何(いずこ)に在る

大法開壇(ダーファーかいだん)して、相継いで来る

歳月(としつき)悠々、千百年(せんひゃく)

縁を結び、正果(しょうか)を得て、衆蓮(しゅうれん)咲く

二〇〇一年六月十九日

漸　齊

惡浪翻中見霞跡
各項劫數已漸齊
蒼穹法正乾坤定
返還世間掐蝨蟣

二零零一年七月十七日

段々と揃う

荒浪が翻る中、霞の跡が顕れる

各項の劫数が段々と揃う

蒼穹法正して、乾坤定まり

世間に返還し、虱を掐す

二〇〇一年七月十七日

真 言

神佛來世間
句句吐真言
天地人神事
真機為法傳

二零零一年八月十九日

真言（しんごん）

神佛、世間に来る
句句、真言を語る
天、地、人、神の事
真機は法を伝える為なり

二〇〇一年八月十九日

秋風涼

邪惡之徒慢猖狂
天地復明下沸湯
拳脚難使人心動
狂風引來秋更涼

二零零一年十月二十五日

秋風涼し（しゅうふうすず）

邪悪之徒（と）、猖狂（たけり）ってはならん

天地再び明るめば、沸湯（ふっとう）に下（くだ）される

拳脚（けんきゃく）は人心を動かせ難（がた）し

狂風（きょうふう）により、秋（あき）更に涼し

二〇〇一年十月二十五日

預

秋不去　春已到
人不信　全來到
天開口　大地燒

預

秋去らざるに　春已(すで)に到(いた)る

人(ひと)信ぜずも　全て到来す

天は口を開け　大地が焼ける

邪惡躲　壞人逃
功湧進　鬼哭嚎
大法徒　上九霄
主掌天地正人道

二零零一年十二月三十日

邪悪は躲(かわ)し　壊人(あくにん)が逃れる
功は湧進(ゆうしん)し　鬼は哭(な)き吠(ほ)える
大法(ダーファー)の徒(と)　九天(きうてん)に上り
天地を主宰し、人道(じんどう)を正す

二〇〇一年十二月三十日

大道行

舉目望青天
洪微皆是眼
上下聚焦處
大道行世間

二零零二年一月十五日

大道(だいどう)を行う

目を挙げて青天(せいてん)を望めば

洪微(こうび)すべて眼(まなこ)

上下焦点の聚(あつま)る処(ところ)

大道世間を行く

二〇〇二年一月十五日

劫

黯黯陰雲幾日渾
嚴寒盡逝已見春
眾生醒見驚心事
中原半壁覆沙塵

二零零二年一月二十二日

劫（こう）

黯黯（あんあん）たる陰雲（いんうん）、幾日（いくにち）渾（にご）る

嚴寒（げんかん）尽く逝（ゆ）きて、已に春を見ゆ

衆生醒めて見る、驚愕（きょうがく）の事

中原（ちゅうげん）の半ばが、砂塵（さじん）に覆（おお）われる

二〇〇二年一月二十二日

掃 除

陰雲過　風還急
赤龍斬　人還迷
邪悪處　有陰霾

掃 除

陰雲過ぎ　風還急（ふうなお）

赤龍（せきりゅう）切らるるも　人還迷（なお）う

邪悪の処　陰霾（いんばい）あり

大法徒　單掌立
除餘惡　正念起
講真相　救眾生
滅惡盡　掃寰宇

二零零二年一月二十三日

大法(ダーファー)の徒　掌を立て

残った悪を除き　正念が起こる

真相を講じて　衆生を救う

悪を滅し尽して　寰宇(かんう)を掃(は)く

二〇〇二年一月二十三日

必 然

眾惡齊下何等狂
欺世大謊翻天揚
戲做人丑發盡飆
烘托大法後下湯

二零零二年一月三十日

必 然

諸悪一斉に下(お)りて、何と狂うものか

世を欺(あざむ)く大嘘(おおうそ)、天を翻(ひるがえ)して撒き散らす

人世(じんせい)の醜悪の役を為し、飆風(ひょうふう)を発し尽し

大法(ダーファー)を浮き立たせた後に、油の鍋に下(くだ)される

二〇〇二年一月三十日

淘

天傾地覆落沙塵
毒害凡世幾億人
慈悲救度知多少
中原處處添新墳

二零零二年一月三十一日

淘

天傾き、地覆い、砂塵(さじん)落つ

俗世の幾億人を毒害す

慈悲で済い済度されるはどれほどか

中原の処処(しょしょ)に、新墳(しんふん)が増える

二〇〇二年一月三十一日

大舞台

人世五千載
中原是戲台
心癡戲中事
陸離多姿彩
醒來看你我
戲台為法擺

二零零二年二月一日

大舞台

人の世、五千年

中原は是(これ)劇の舞台

心は劇中の事に夢中になり

陸離(りくり)として多様多彩

醒めてから、あなたと私を見れば

舞台は法の為に設けられている

二〇〇二年二月一日

戯一台

天作幕　地是台
運乾坤　天地開
萬古事　為法來
法輪轉　新三才

二零零二年二月五日

劇一台

天は幕と作(な)り　地は是(これ)舞台

乾坤を運行し　天地開く

万古(ばんこ)の事　法の為に来る

法輪(ファールン)轉じて　新たな三才

二〇〇二年二月五日

精進正悟

學法不怠變在其中
堅信不動果正蓮成

二零零二年四月六日

精進し正しく悟る

学法を怠らざれば、変化は其の中に在り
堅信して動かざれば、正果になり蓮が成る

二〇〇二年四月六日

法正乾坤

慈悲能溶天地春
正念可救世中人

二零零二年四月六日

法は乾坤を正す

慈悲は天地の春を溶かし

正念は世中(よのなか)の人を救う可(べ)し

二〇〇二年四月六日

大法好

法輪大法好
大穹法光照
正法洪勢過
方知無限妙

大法(ダーファー)は素晴らしい

法輪大法(ファールンダーファー)は素晴らしい

大穹は法光(ほうこう)が照らす

正法(しょうぼう)の洪勢が過ぎて

方(はじめて)知る無限の妙

法輪大法好
漸入世人道
眾生切莫急
神佛已在笑

二零零二年四月二十五日

法輪大法(ファールンダーファー)は素晴らしい

漸(ようや)く世人の道(みち)に入る

衆生は急ぐ切莫(なかれ)

神佛は已に笑っている

二〇〇二年四月二十五日

鐘 樓

洪聲震法界

法音傳十方

二零零二年五月五日

鐘 樓（しょう ろう）

洪声法界（こうせいほっかい）を震わし

法音十方（じっぽう）に伝わる

二〇〇二年五月五日

鼓 樓

重錘之下知精進

法鼓敲醒迷中人

二零零二年五月五日

鼓 樓（ころう）

重錘（じゅうすい）の下（した）、精進を知る

法鼓敲（ほっくたた）いて、迷いの中の人を醒ます

二〇〇二年五月五日

佛法無邊

香爐盡收亂法鬼
寶鼎熔化不法神

二零零二年五月五日

佛法無辺

香炉(こうろ)は法を乱す鬼を収め尽くし
宝鼎(ほうてい)は不法な神を熔化(ようか)す

二〇〇二年五月五日

入無生之門

騎虎難下虎
人要與神賭
惡者事幹絶
堵死自生路

二零零二年五月十三日

無生之門に入る

騎虎しつつも虎より下り難し

人が神に賭けんとす

悪者事をやり尽くし

自ら生路を塞ぎ切る

二〇〇二年五月十三日

如 來

帶著如意真理來

灑灑脫脫走四海

如 来

如意、真理を帯びて来る

洒脱(しゃだつ)として、四海(しかい)を歩む

法理撒遍世間道
滿載眾生法船開

二零零二年五月十三日

法理を世間に遍く撒き散らし

衆生を満載して、法船(ほうせん)は出帆(しゅっぱん)す

二〇〇二年五月十三日

正念正行

大覺不畏苦
意志金剛鑄
生死無執著
坦蕩正法路

二零零二年五月二十九日

正念正行（しょうねんしょうぎょう）

大覚は苦を畏（おそ）れず

意志は金剛より鋳（い）られる

生死に執着無く

坦坦（たんたん）たり正法（しょうぼう）の路（みち）

二〇〇二年五月二十九日

神路難

悠悠萬世緣
大法一線牽
難中煉金體
何故步姍姍

二零零二年五月三十日

神の路難し

悠々たる萬世の縁

大法の一線より牽く

難中に金体を煉し

何故のんびりと歩むのか

二〇〇二年五月三十日

正 神

正念正行
精進不停
除亂法鬼
善待眾生

二零零二年五月三十日

正（しょう） 神（しん）

正念正行

精進停まらず

法を乱す鬼を除き

衆生を善く遇（ぐう）す

二〇〇二年五月三十日

天又清

天昏昏地暗暗
神雷炸陰霾散
横掃亂法爛鬼
別說慈悲心淡

二零零二年六月十六日
寫給美國中部法會

天又清し

天昏昏(こんこん)、地暗暗(あんあん)

神雷炸(しんらい さ)けて、陰霾(いんばい)散ず

法を乱す爛鬼(らん き)を一掃するに

慈悲の心、淡(あわ)きと説くなかれ

二〇〇二年六月十六日

米国中部法会に寄せて

震 懾

神筆震人妖
快刀爛鬼消
舊勢不敬法
揮毫滅狂濤

二零零二年七月二十八日

震 懾（しん しょう）

神筆（しんひつ）、人妖（じんよう）を震わし

快刀（かいとう）、爛鬼（らんき）を消す

旧勢力、法を敬わず

揮毫（きごう）して、狂涛（きょうとう）を滅す

二〇〇二年七月二十八日

快 講

大法徒講真相
口中利劍齊放
揭穿爛鬼謊言
抓緊救度快講

二零零二年八月二十一日

早く講ず

大法(ダーファー)の徒、真相を講ず

口(く)中の利剣(りけん)、一斉に放つ

爛鬼(らんき)の嘘を暴き出し

急いで救い済度し、早く講ず

二〇〇二年八月二十一日

清 醒

大法徒　抹去涙
撒旦魔　全崩潰
講真相　發正念
揭謊言　清爛鬼

二零零二年九月一日

はっきりと醒ます

大法(ダーファー)の徒　涙を拭(ぬぐ)いたまえ

サタンの魔　全て崩潰(ほうかい)す

真相を講じ　正念を発し

嘘を暴き　爛鬼(らんき)を除去する

二〇〇二年九月一日

誰 迷

細細微微一塵埃
造化眾生土中埋
迷中世人能得法
愚狂反在塵世外

二零零二年九月五日

誰か迷う

細々微々たる一塵埃(じんあい)

造化(ぞうか)の衆生は土中(どちゅう)に埋まる

迷いの中、世人は法を得られ

愚狂(ぐきょう)は反(かえ)って、塵世(じんせい)の外に在り

二〇〇二年九月五日

網在收

暴悪幾時狂
秋風已見涼
爛鬼心膽寒
末日看絶望

二零零二年九月十四日

網を収めつつある

暴悪幾時(いくとき)まで狂う
秋風(しゅうふう)已に涼し
爛鬼(らんき)心怖がり
末日(まつじつ)の絶望が現れる

二〇〇二年九月十四日

還 吧

十年傳法大門開
多少眾生進不來
迷在世間忘了本
狂風起時隨著壞

二零零二年十二月十二日

償えよ

十年の伝法(でんぼう)、大門(だいもん)開くが

どれほどの衆生が入って来られず

世間に迷いて本(もと)を忘れ

狂風起こる時、付き従って壊れる

二〇〇二年十二月十二日

神 威

塵消霧散氣漸清
世人迷醒眼中驚
大法洪勢漫人世
再看神佛世上行

二零零二年十二月廿八日
壬午年十一月廿五日

神 威

塵消霧散(じんさんむしょう)して、気漸(ようや)く清し
世人迷いより醒めて、眼中驚く
大法(ダーファー)の洪勢、人世(じんせい)に満ち溢れ
再び見る、神佛の世上を行くを

二〇〇二年十二月二十八日
壬午年十一月二十五日

圍 剿

天翻地覆人妖邪
欺世大謊陰風切
大法眾徒講真相
正念法力搗妖穴

二零零三年一月二十三日

包囲殲滅す

天地ひっくり返り、人妖の邪

世を欺く大嘘の陰風は切なり

大法の衆徒、真相を講じて

正念の法力、妖穴を搗く

二〇〇三年一月二十三日

梅　元曲

濁世清蓮億萬梅
寒風姿更翠
連天雪雨神佛涙
盼梅歸

梅　元曲

濁世(じょくせ)に清蓮(せいれん)億万の梅

寒い風の中、姿は更に青翠(せいすい)なり

連日の雨雪(うせつ)は神佛の涙のよう

待ち望む梅の帰るを

勿迷世中執著事

堅定正念

從古到今

只為這一回

二零零三年一月二十八日

世中(よのなか)の執着事(ごと)に迷う勿(なか)れ

正念を堅く定め

古(いにしえ)より今まで

只この一回の為なり

二〇〇三年一月二十八日

下 塵

法輪轉時必有狂
國力傾盡為吾忙
靜觀丑角妖戯盡
只剰殘土風中揚

下塵（かじん）

法輪（ファールン）の轉じる時、必ず狂有り

国力を傾け尽して、吾（われ）の為に忙しがる

丑角（うしかど）の妖戯（ようぎ）、尽きるを静観し

只剰（あま）る残土（ざんど）が風の中に舞い揚がる

輪迴五千雲和雨
揮去封塵看短長
大戲誰是風流主
只為眾生來一場

壬午年臘月二十九日
二零零三年一月三十一日

輪廻五千年の雲と雨

封塵(ほうじん)を払い除(の)けて、良し悪しを見る

大いなる劇は、誰か是(これ)風流の主(ぬし)

只衆生の為に、一場(いちじょう)来たれり

壬午年腊月二十九日

二〇〇三年一月三十一日

大法行　宋詞

法輪大法
深未測
成大蒼穹
造眾生
三字真言
理白言明
常人知表得厚福
官吏知淺明如鏡
王知理
安邦治國
得太平

大法行（ダーファーぎょう）　宋詞

法輪大法（ファールンダーファー）

深きこと測り知れず

大いなる蒼穹（そうきゅう）を成し

衆生を造る

三字の真言

理明白で、言（げん）明晰

常人その表（おもて）を知れば、厚福を得

官吏（かんり）その浅きを知れば、明にして鏡の如し

王、その理を知れば

安邦治国

太平を得

出盛世
君臣正
延陰福
民安定
五穀年年豊
修者更明
一朝得法入道中
精進實修功法成
反迫害
救度眾生
神道行

二零零三年三月二日
癸未年正月三十日

盛世(せいせい)が現れ

君臣も正し

陰福を延ばし

民は安定し

五穀年々豊か

修者は更に明らか

一朝法を得て道中に入る

精進実修して功法成就する

迫害に反し

衆生を救度し

神の道を行く

二〇〇三年三月二日

癸未年正月三十日

一念中

坦坦蕩蕩正大穹
巨難伴我天地行
成就功德腦後事
正天正地正眾生
真念洪願金剛志
再造大洪一念中

癸未年五月十三日

一念の中

坦坦蕩蕩として、大穹を正す

巨難伴って、我天地を行く

功徳を成就すは、心にあらず

天を正し地を正し、衆生を正す

真念洪願、金剛の志

大洪を再び造るは、一念の中

癸未年五月十三日

唐 風

身在此山中
神思遊仙境
誰是古中原
不知大唐風

癸未六月

唐 風

身は此(こ)の山中に在りて

神思(しんし)は仙境を訪れる

誰か是古(これいにしえ)の中原

大唐風を知らず

癸未六月

看 好

世間雖小　大穹盡照
滿天是眼　衆神聚焦
穹蒼從組　乾坤再造
爾要它要　可悲可笑
法主正穹　何物可逃

二零零三年六月十九日

好く見たまえ

世間小なりと雖(いえど)も　大穹を尽(ことごと)く照らす

満天是眼(これまなこ)　衆神(しゅうじん)焦点をあてる

穹蒼(きゅうそう)はもう一度組まれ　乾坤を再び造る

爾(なんじ)も要る彼も要る　悲しみ可笑しい

法主(ほうしゅ)は穹を正して　何物が逃れる可(べ)しか

二〇〇三年六月十九日

讀學員文章

利筆著華章
詞勁句蘊強
科學滿身洞
惡黨衣扒光

二零零三年七月二十二日

学員の文章を読む

鋭い筆鋒(ひっぽう)で、華章を著(あらわ)し

詞句(しく)勢いあり奥深く

科学は満身の洞(ほら)

悪党の衣(ころも)はすべて剥(は)ぎ取られる

二〇〇三年七月二十二日

亂 世　宋詞

中原上下五千年
朝朝代代換新顔
末世天無道
行惡又行妖

乱 世　宋詞

中原上下五千年

朝朝代代、新顔に換わる

末世（まつせ）、天に道（どう）無く

悪を行い、又妖を行う

豺狼世上走
亂黨妖領頭
不是惡不報
洪勢就來到

二零零三年八月一日

豺狼（さいろう）、世を横行し
乱党を妖が率先す
悪報われずにあらず
洪勢すぐに到来す

二〇〇三年八月一日

正法看　宋詞

漢室天下韓信打
大唐太宗朝疆大
岳飛六郎保中原
為了啥
眾生來此要得法

二零零三年八月十五日

正法見る（しょうぼう）　宋詞

漢室の天下は韓信が打ち取り

大唐太宗の朝は疆（かぎり）大き

岳飛、六郎は中原を保つ

何の為か

衆生此（ここ）に来て法を得んとす

二〇〇三年八月十五日

征

馳騁萬里破妖陣
斬盡黑手除惡神
菅你大霧狂風舞
一路山雨洗征塵

二零零三年九月二日

征（せい）

万里馳駆（ちく）して、妖陣を破る

黒手（くろて）を斬り尽くして、悪神を除く

大霧（おおぎり）にせよ、狂風舞うにせよ

一路の山雨（さんう）、征塵（せいじん）を洗う

二〇〇三年九月二日

理智醒覺

少息自省添正念
明析不足再精進

二零零三年九月四日

理智 醒覚（せいかく）

少なからずに休み自省（じせい）して、正念を強め

不足を明らかにして、再び精進す

二〇〇三年九月四日

金剛志

秋高氣漸清　靄靄陰霾過
時日掐指算　大穹去無多
迷眾各逞亂　巨危不知迫
力挽崩裂前　怎容爛鬼禍
志念超金剛　洪微是我做

二零零三年九月四日

金剛の志

秋高く、気は段々と清らか

靄靄(あいあい)たる陰霾(いんばい)過ぎ

指折りて時日(じじつ)を算(かぞ)え

大穹去るは多からず

衆を迷わせて各々(おのおの)乱れを示し

巨大な危険されど緊迫を知らず

崩壊の前に全力で挽回し

爛鬼(らんき)の禍害(かがい)をなぜ許す

志の念は金剛を超え

洪微(こうび)は是我(これわれ)が做(な)す

二〇〇三年九月四日

法正一切

衝出三界外
空無顯大宇
法正乾坤久
預歇惡又起
四大已風化
舊法在解體

法は一切を正す

三界の外へ衝出(しょうしゅつ)し

空無に大宇(だいう)顯れる

法は乾坤を正して久しく

休まんとすれば悪又起こる

四大(しだい)は已に風化し

旧法は解体しつつある

天體無限大
寰體又洪極
大穹已去遠
主位更絢麗
天性豪氣洪
消磨也不去
意如金剛志
一統大法理

二零零三年九月二十日

天体は無限に大きく

寰体(かんたい)は又極めて洪(ひろ)し

大穹は已に去ること遠し

主位(しゅい)は更に絢麗(けんれい)なり

天性(てんせい)の豪気は洪し

消磨しども去らず

意は金剛の志の如く

大法(ダーファー)の理を一統(いっとう)す

二〇〇三年九月二十日

龍泉寺

壯麗古刹密林間
晨霧繚繚起湖面

龍泉寺

壮麗たる古刹(こさつ)、密林の間(ま)

朝靄(あさもや)が湖面に立ち込めている

樓台亭閣白雲下
唐風新寺有真仙

二零零三年九月三十日

楼台亭閣、白雲の下

唐風の新しい寺に、真仙有り

二〇〇三年九月三十日

大法徒　宋詞

大法徒
蒙難在中原
天地無道爛鬼狂
正法洪勢在眼前
法正人世間

大法の徒（ダーファー）　宋詞

大法の徒（ダーファー）

中原にて難を蒙（こうむ）り

天地は無道、爛鬼（らんき）狂う

正法の洪勢、眼前に在り

法は人の世を正す

大法徒
重任擔在肩
救度眾生講真相
清除毒害法無邊
神路不算遠

二零零三年十月一日

大法（ダーファー）の徒

重き任を肩に担う

衆生を救度し、真相を講じ

毒害をすっかり取り除いて、法は無辺

神の路はさほど遠からず

二〇〇三年十月一日

法輪常轉

大法圓容乾坤正

法王慈悲造大穹

二零零三年十月三日

法輪（ファールン）は常に轉ず

大法（ダーファー）は圓容にして、乾坤を正し

法王は慈悲にして、大穹を造る

二〇〇三年十月三日

洪誓大願

歴盡滄桑洪願了

歳月蹉跎一念中

二零零三年十月七日

洪誓（こうせい） 大願（たいがん）

滄桑（そうそう）を遍歴（へんれき）して、洪願（こうがん）了す

歳月蹉跎（さだ）にして、一念の中

二〇〇三年十月七日

救大穹

古今不曾有
將來天地久
看恆古大穹蒼
誰還敢再下走

二零零三年十月十二日

大穹を救う

古今かつて有らず

将来天地久し

恆古(こうこ)たる大蒼穹を見て

誰かまた敢えて再び下走(かそう)す

二〇〇三年十月十二日

劫 數　元曲

中原大地
五千文明
風浪不止
西來幽靈
害眾生
破古風
人快醒
神州大法開行

二零零三年十一月十一日

劫(こう)数(すう)　元曲

中原の大地

五千年の文明

風浪(ふうろう)止まらず

西より幽霊来たり

衆生を害し

古風を破壊す

人は早く醒めよ

神州では大法(ダーファー)が動き出す

二〇〇三年十一月十一日

危

世風日下衆助流
爛鬼帶頭人跟走
我為世人愁
人不為己憂

二零零三年十一月二十日

危

世の気風、日増しに下り、衆(しゅう)助長す

爛鬼(らんき)率先して、人々が後に付き従う

我(われ)は世人(せじん)のために愁(うれ)うるも

人は己のために憂(うれ)ず

二〇〇三年十一月二十日

蓮　元曲

萬朶淨蓮我栽

嚴寒傲雪齊開

天晴滿園春來

仙枝百態

香風沁飄天外

二零零三年十二月一日

蓮（はす）　元曲

萬輪の浄蓮（じょうれん）を、我（われ）が栽（さい）す

厳寒の中、雪に屈せず、一斉に咲く

天晴れ、園（その）に満ちて、春来たる

仙枝百態（せんしひゃくたい）

香風沁（こうふうし）みて、天外に飄（ひょう）す

二〇〇三年十二月一日

斷　元曲

修不難
心難去
幾多執著何時斷
都知苦海總無岸
意不堅
關似山
咋出凡

二零零四年一月一日

断　元曲

修(しゅう)難しからず
心(こころ)去り難し
幾多の執着は何時(いつ)に断つ
皆も知る苦海(くかい)、総て岸無しを
意志堅からざれば
関(かん)は山に似て
如何に凡(ぼん)を出(い)づるか

二〇〇四年一月一日

香 蓮

淨蓮法中生
慈悲散香風
世上洒甘露
蓮開滿天庭

二零零四年元旦

香蓮（こうれん）

浄蓮（じょうれん）法中に生ず

慈悲にて香風を散らし

世上に甘露を洒（そそ）ぎ

蓮は開いて天庭（てんてい）に満つ

二〇〇四年元旦

法正人間時

爛鬼已滅絶
黑手化膿血
世人幹的事
必遭惡疫虐

二零零四年一月一日

法が人間界を正す時

爛鬼(らんき)已に絶滅し

黒手は膿血(のうけつ)に化す

世人のやった事

必ずや悪疫(あくえき)に遭う

二〇〇四年一月一日

蠢　元曲

狂狂狂
跳上樑
烏鴉遮太陽
蠢惡謊
大曝光
忌火攻心現原象
蟾蜍躍下油湯

二零零四年一月八日

愚か　元曲

狂、狂、狂

梁(はり)の上に跳び

烏鴉(からす)が太陽を遮(さえぎ)る

愚(ぐ)、悪、嘘

大いに暴かれる

嫉妬心で理性を失い、本性が現れ

蟾蜍(がまがえる)は高く飛び跳ねても、油の鍋に入れられる

二〇〇四年一月八日

別 哀

身臥牢籠別傷哀
正念正行有法在
靜思幾多執著事
了卻人心悪自敗

二零零四年一月十三日

哀しまないで

身は牢屋に臥すれども、哀しまないで

法在りて、正念正行

幾多の執着の事を静思し

人心を捨て去れば、悪は自ずから敗る

二〇〇四年一月十三日

腰鼓隊　元曲

腰鼓陣

法中神

法鼓聲聲都是真善忍

三界除惡救世人

雄姿正念震天門

爛鬼哪遁

二零零四年一月二十二日

腰鼓隊（ようこ）　元曲

腰鼓の陣

法中の神

法鼓声声（ほっくせいせい）、すべて真善忍

三界で悪を除き、世人を救い

雄姿の正念、天門を震わす

爛鬼何処（らんきどこ）に遁（のが）す

二〇〇四年一月二十二日

難

千辛萬苦十五秋
誰知正法苦與愁
只為眾生能得救
不出洪微不罷休

二零零四年一月二十二日

難

千辛萬苦（せんしんばんく）、十五年

誰か知る、法を正す苦と愁いを

ただ衆生が救われる為に

洪微（こうび）出でずば、決して休めず

二〇〇四年一月二十二日

師徒恩

狂悪四年颱　穩舵航不迷
法徒經魔難　重壓志不移
師徒不講情　佛恩化天地
弟子正念足　師有回天力

二零零四年二月一日

師徒(しと)の恩

狂悪は飄風(ひょうふう)四年吹き荒る　舵穩やかで航(こう)に迷わず

法徒魔難を経て　重圧にも志移らず

師徒は情を講ぜず　佛恩は天地を化(か)す

弟子正念足りれば　師は回天の力有り

二〇〇四年二月一日

神 醒

眾生快快醒
中原設陷阱
都是為法來
何故理不清

二零零四年二月十七日

神 目醒めよ

衆生よ、早く目醒めよ
中原に落穴(おとしあな)が設(もう)けられた
すべて法のために来たのに
なぜ理がはっきりと分からない

二〇〇四年二月十七日

天門已開

佛恩浩蕩度眾生
再造乾坤大法來
洪願穹體天地固
正微正洪正三才
世人能醒正念出
萬古天門從此開

二零零四年二月二十八日

天門は已に開く

佛恩浩蕩（こうとう）、衆生を済度す

大法（ダーファー）来て、乾坤を再造す

洪願により、穹体天地固まり

微を正し、洪を正し、三才を正す

世人醒め、正念出ずれば

万古（ばんこ）の天門、此れから開く

二〇〇四年二月二十八日

怕 唵

你有怕　它就抓
念一正　惡就垮
修煉人　裝著法
發正念　爛鬼炸
神在世　證實法

二零零四年二月二十九日

恐れ無し

あなたに恐れ有らば　它は直(すぐ)に抓(つか)む

念を正にすれば　悪は直に崩れる

修煉の人　法を持っており

正念を発すれば　爛鬼炸(らんきさ)く

神が世に在りて　法を実証す

二〇〇四年二月二十九日

轉 輪

百年紅朝一路殺
乾坤倒運戲中華
看明此時紅花盛
可曉它日開蓮花

二零零四年三月五日

轉 輪

百年の紅朝の一路、人殺し

乾坤逆に運行し、中華を戯(たわむれ)る

今は紅花(こうか)の盛(さか)りが見えるけれども

他日蓮花(れんか)が咲くを、悟れるか

二〇〇四年三月五日

洪 劫

法正洪穹除舊塵
天地茫茫處處春
悠悠萬古洪勢過
再看新宇佛道神

二零零四年三月八日

洪（こう） 劫（こう）

法は洪穹（こうきゅう）を正し、旧塵を除く

天地は茫茫たるも、処処（しょしょ）に春

悠悠たる万古の洪勢、過ぎれば

再び新しい宇宙の佛道神を見る

二〇〇四年三月八日